微睡の窓

布団から顔だけ出して外を見遣っては
ふと昔思い出して心痛めた
硝子越しに街路を見、また少し微睡み
あの時とこの時が混ざるよう蕩けた

夕刻から輪をかけ増して相当混み合ってきた
小さな街の通りで皆んながもう待ち遠しげ
空に飴色の月が覗けば
「そら、パレードが着いたぞ」と声が

手を繋ぎ寄り添う相思な二人を一飲みに
沸く街の人混みは津波みたいで
離すまいと固く絡む僕の左手と
その人の右手をいとも簡単に引き裂いていく

西陽射している窓から目逸らし狸寝入る
耳に入ってくる声にわざとらしく欠伸してみる
すると涙が溢れそうになったんだ
君は、ずっと前から表通りに立ったまんま